二〇〇六年も中国映画に注目
―中国映画あれこれⅡ―

坂和　章平

一　はじめに―映画検定の実施と中国電影一〇〇年

〇六年六月二五日キネマ旬報社とキネマ旬報映画総合研究所主催による第一回映画検定が実施された。これは「映画はエンターテインメントであると同時に、多くのことを学ぶことが出来る時代の扉でもあります」「映画をもっと楽しむための、腕試しの道場のようなものとして、映画検定試験を発案しました」との趣旨で実施されたもので、四級・三級・二級にランク分けされた受験生は約九六〇〇名。一日限りながら、司法試験の受験勉強以来三〇数年ぶりに『公式テキストブック』と『公式問題集』を猛勉強した甲斐あって、私は見事四級に合格。その「知識」によれば、世界ではじめて「フィルムに映像を記録し、そのフィルムにライトを当てて映像をスクリーンに投影するという今日の映画と同じシステムが完成」したのは一八九五年。

他方、朝日新聞〇六年六月一四～一六日は、「中国電影（えいが）一〇〇年」という特集を組んだ。これによれば、北京で〇五年一二月「中国電影誕生百周年記念大会」が大々的に開かれたが、これは中日で第一号の映画が一九〇五年につくられたことを記念する催しだった。それから一〇〇年。近時の中国映画の発展はすばらしく、目を見張るものがある。私は『法苑一三四』(〇三年一〇月執筆・〇四年一月発行)に「二〇〇四年も中国映画に注目―中国映画あれこれ―」を書いたが、それから三年近く経ち、中国映画もそして私の映画評論もさらに「進化」した。そこで今回は、「中国映画あれこれⅡ」を紹介したい(ちなみに『法苑一三四』は早稲田大学の中国人留学生の目に止まったようで、論文に引用したいとの電話が七月中旬にあり、私はこれを快諾。彼の論文にどのように引用されるのか注目している)。

二　『シネマルーム』の相次ぐ出版と『坂和的中国電影大観』

『法苑一三四』は『SHOW—HEYシネマルーム』1、2を出版した後に書いたものだが、私の映画評論家活動は次第に活発化し、以降3（〇四年四月）、4（一一月）、5（一二月）、6（〇五年五月）、7（一〇月）、8（〇六年二月）、9（七月）を次々と出版し、現在パート10、11を製作中。今や弁護士稼業をさしおいて（？）真っ昼間に試写室で二本鑑賞という日もあり、年間約三〇〇本というものすごさ。ここで特筆すべきは、パート5を『坂和的中国電影大観』としたこと。そして、その特徴は「坂和的中国映画鑑賞の視点あれこれ」と題して、①坂和的　中国映画のバイブル、②坂和的　中国旅行体験と中国映画、③坂和的　地図からみる中国映画、④坂和的　中国映画監督列伝、⑤坂和的　張藝謀VS陳凱歌比較という五本の坂和的「論文」をまとめたこと。さてその出来は？

三　中国旅行によるお勉強も

『坂和的中国電影大観』出版までの私の中国旅行は、①香港（九七年六月）、②大連・旅順・瀋陽（〇〇年八月）、③西安・敦煌（〇一年八月）、④北京（〇三年一一月）、⑤杭州・紹興・烏鎮（〇四年三月）、⑥桂林・深圳・広州（〇四年六月）だったが、その後も中国旅行熱はますます高まり、⑦西双版納・昆明・麗江・大理（〇四年一一月）、⑧台湾（〇五年三月）、⑨山東省クルーズ（青島・済南・曲阜・泰山）（〇五年一〇月）、⑩上海・杭州・烏鎮・無錫・鎮江・揚州・蘇州・周庄（〇六年三月）と続いた。このうち、③は『法苑一二七』、⑧は『法苑一四〇』、⑨は『法苑一四三』にてその旅行記を紹介済み。これらの旅行は、事前のガイド本や資料の勉強はもちろん、現地での膨大な量の写真撮影を含めた朝六時から深夜〇時までの貪欲な行動に象徴されるとおり、すべて勉強。その「成果」は前記法苑の他、私のホームページを読んで頂きたい（www.sakawa-lawoffice.gr.jp）。

四　『法苑一三四』での中国映画と『坂和的中国電影大観』の六六本

『法苑一三四』は、当時『HERO（英雄）』（〇二）の公開が大きな話題であったため、中国第五世代監督の張藝謀（チャン・イーモウ）と陳凱歌（チェン・カイコー）を中心に解説したうえ、二〇〇四年の「中国映画あれこれ」として、『山の郵便配達』（九九）、『活きる』（九四）、『小さな中国のお針子』（〇二）、『北京ヴァイオリン』（〇二）、『春の惑い』（〇二）、『鬼が来た！』（〇〇）、『ミッシング・ガン』（〇一）を紹介した。しかしそ

の後の『坂和的中国電影大観』の守備範囲（?）は飛躍的に広がった。ここで取りあげたのは、日中戦争に関連して日本映画の『戦争と人間』三部作（七〇・七一・七三）や劇団四季のミュージカル『異国の丘』（〇一）等を含めた別表記載の合計六六本。この分類法を見れば、ほぼその作品の特徴がわかるはず。この六六本についての坂和的評論は、中国大好き・歴史大好き・勉強大好きな映画評論家であると同時に弁護士としての視点を加えたもので、私にしか書けないものと自負している。その詳細は同書を読んで頂きたいが、私の夢は将来これが中国語に翻訳されて中国一三億の人民に読まれること・・・。

五　『坂和的中国電影大観』以降の中国映画あれこれ

1　『坂和的中国電影大観』の出版から約一年半。その間の私の中国・香港・台湾映画の評論は三〇数本に達した。その中には①台湾のイケメン人気グループF4が主演した若者向け映画『スター・ランナー（少年阿虎）』（〇三）、『マジック・キッチン（魔幻厨房）』（〇四）、『スカイ・オブ・ラブ（愛、断了線）』（〇三）、②これぞ香港流アクション映画！という『レディ・ウェポン（赤裸特工）』（〇二）、『爆裂都市』（〇四）、『香港国際警察』（〇四）、『花都大戦　ツインズ・エフェクトⅡ』（〇四）、③一風変わった（B級？）香港映画『風雲！格闘王』（〇三）、『桃色』（〇四）、『柔道龍虎房』（〇四）、④『SAYURI』（〇五）で章子怡（チャン・ツィイー）、鞏俐（コン・リー）を従えて登場した楊紫瓊（ミシェル・ヨー）のアクション映画『レジェンド　三蔵法師の秘宝』（〇二）、『シルバーホーク』（〇四）、⑤香港映画の傑作『インファナル・アフェア』（〇二・〇三）の第三部『終極無間』（〇三）や『SPL（殺破狼）／狼よ静かに死ね』（〇五）、⑥ラブストーリーの秀作『ターンレフト　ターンライト』（〇三）、『忘れえぬ想い』（〇三）、『五月の恋』（〇四）等がある。紙面上その紹介は省略し、詳細は『シネマルーム』6、7、8、9で。ここでは以下、最近の絶対的お薦め作のみを紹介しよう。

2　〇六年五～六月に相次いで観たのが、**『玲玲の電影日記』**（〇四）、**『緑茶』**（〇二）、**『我愛你（ウォ・アイ・ニー）』**（〇三）、**『胡同（フートン）のひまわり』**（〇五）の四本。ちなみに前記朝日新聞が取りあげたのも『胡同のひまわり』。これは少年期を文革時代に過ごした張揚（チャンヤン）監督の自伝的作品で、主人公は監督と同じ一九七六年生まれと設定。四合院という北京の伝統的建物の中で過ごす主人公の九歳、一九歳、三二歳という三つの時代を中心に、画家としての父子の葛藤と対立や家族愛がイキイキと描かれていく。今北京のまちは〇八年のオリンピックに向けて大改造中で、伝統的な

四合院や胡同は次々と姿を消し高層マンションに変わっているが、まちづくりや都市法政策の観点からはさまざまな検討が必要。ちなみに私の弁護士としてのライフワークは都市法政策だから、文化大革命終了後の三〇年間の動きを背景とし、胡同や四合院に焦点を当てたまちづくりを描くこの映画は、私の勉強の重要なネタ。**『玲玲の電影日記』**は、中国西北部の田舎まちを舞台とし、野外映画館での映画鑑賞を唯一の楽しみとしていた文化大革命時代の中国人民の姿を描くもの。女優を夢見る母親とその娘玲玲はいつしか離別するが、玲玲と一緒に遊んでいた悪ガキも成長し、今は北京に。そして運命的な再会を果たした二人は？という映画だが、そのタイトルどおり、あの時代この時代の中国電影がいっぱい登場する秀作。**『緑茶』**は中国四大女優の一人 趙薇（ヴィッキー・チャオ）が、カトリーヌ・ドヌーブ主演の『昼顔』（六七）のような女の二面性を一人二役で見事に演じ、これに振り回される男を中国を代表する名俳優の姜文（チアンウェン）が演じた作品。私の愛読書（？）『人民中国』〇六年六月号にある水野衛子氏の「名作のセリフで学ぶ中国語」には、この映画に登場するレストランやバーそしてお茶についての詳細な解説も。ちなみにここに登場する「三里屯」は私も北京旅行の際に訪れた「洋街」で、そのアメリカナイズされた華やかさにはビックリ。日本人男性が「你好（ニーハオ）」の次に覚える中国語（？）をタイトルにした**『我愛你』**は、これも中国四大女優の一人徐静蕾（シュー・ジンレイ）を登場させながら、タイトルとは裏腹に夫婦ゲンカがテーマ。その鬼気迫る夫婦ゲンカをすべてアドリブでやらせたというからすごい！こんなすばらしい映画を四本もたて続けに観たことが、本稿を書こうと思いたつ動機だ。

3

〇六年七月二九日付産経新聞には「中国に影響を与えた外国人五〇人」として伊藤博文、田中角栄元首相と並んで、**『単騎、千里を走る。』**（〇五）に主演した高倉健を「中国の男性映画ファンが崇拝、女性ファンは『理想の男性』とみた」との記事があった。この映画は、近時『HERO（英雄）』『LOVERS』（〇四）とハリウッド流娯楽大作に傾注していた張藝謀監督が、『君よ憤怒の河を渉れ』（七四）で中国で大人気となった健さんを主役として迎え、『あの子を探して』（九九）、『初恋のきた道』（〇〇）、『至福のとき』（〇二）の原点に回帰した秀作。その舞台は私も三連泊した雲南省の美しいまち麗江だが、テーマは父と息子の葛藤。「千里走単騎」は、劉備の妻子とともに曹操の手に落ちた劉備の義弟関羽が再三の引き止め策にも負けず、単騎で劉備の妻子を伴って劉備の元へ帰っていくという三国志における感動の物

語だが、健さんが単騎麗江を訪れたのは、さて何のため？ちなみに『PROMISE』（〇五）はハリウッド大作にこだわった陳凱歌監督の失敗作（？）で、彼も『北京ヴァイオリン』の原点に回帰してもらいたいものだ。

近時の注目点は、第六世代監督と呼ばれる陸川、張元、王小帥、賈樟柯たちで、前述した『緑茶』・『我愛你』は張元の作品。なお『鬼が来た！』を監督した姜文も第六世代監督の一人。賈樟柯の『世界』（〇四）は、北京郊外にあるテーマパーク「世界公園」を舞台として描かれる、山西省の大同から北京に出てきた若者たちの青春群像劇で、オフィス北野（北野武）がその才能に注目して資金を出したほどの注目作。都会と地方、豊かさと貧しさ、勝ち組と負け組などどうしようもない中国の実態を赤裸々に描き、自由な世界に見えながら実は束縛いっぱいの現実を切なくアピールしている。ちなみに、八九年に北京電影学院を卒業した張元がドキュメンタリー作品でその成果を世界に問いロカルノ国際映画祭などで高く評価されながら、その作品が国内では上映禁止処分とされていたように、賈樟柯も『一瞬の夢』（九七）、『プラットホーム』（〇〇）、『青の稲妻』（〇二）がベルリンやベネチア映画祭等で数々の賞を受賞しながら、国内ではずっと上映禁止処分とされていた。なお九月一二日付朝日新聞によれば、第六三回ベネチア映画祭で、三峡ダム建設による社会や心のひずみを描いた賈樟柯監督の『三峡好人』が金獅子賞を受賞したとのこと。必ず観なければ・・・。陸川監督の、チベット語で「青い山々」を意味する『ココシリ』（〇四）は、チベットカモシカを守るため、民間パトロール隊の過酷な生命を賭けた闘いを描く感動作で、九三年に実際に結成された団体をある記者が取材したことを契機として製作された。一〇〇万頭もいたチベットカモシカは乱獲の結果、九〇年代には二万頭を割り込み絶滅の危機に瀕していたが、この新聞記事によって国家級自然保護区管理局が設立され、その数は大きく回復中で、それにはこの映画の寄与も大きいはず。公害・環境問題が深刻化する中国はもとより、全世界に大きな問題提起をした骨太の作品だ。また〇六年七月二二日付読売新聞によると、「南京事件」から七〇周年を迎える〇七年に向けてこれを題材とした映画三作の計画が進んでいるが、その一つ『南京！南京！』（仮題）は〇四年東京国際映画祭の審査員特別賞を受賞した陸川監督によるもの。同監督は米映画会社と江蘇省文化産業グループとの共作『南京災禍』の舞台設計に加わる見返りとして同グループから資金提供を受け

るとのことだが、さてその評価は？

5 **『ジャスミンの花開く』**（〇四）は、今や世界的大女優となった章子怡が茉（モー）、莉（リー）、花（ホア）という三世代の女性を一人三役で熱演する秀作。一九三二年の第一次上海事変直前の三〇年、日本を追っ払い新生中国の建国に燃える五〇年、そして文化大革命の嵐が収まった八〇年という三つの時代において、激動する上海を舞台に五〇年間にわたって綴られていく恋と人生模様は圧巻で、章子怡ファンは必見の映画。ちなみにこの監督は章子怡が最も輝いていた作品『初恋のきた道』の撮影監督であった侯詠（ホウ・ヨン）。

6 『男たちの挽歌』シリーズ、『チャイニーズ・ゴースト・ストーリー』等で有名な香港ニューウェーブの旗手徐克（ツイ・ハーク）が、梁羽生（リャン・ユーシェン）の『七剣下天山』を原作として描く武侠映画の最高峰が**『セブンソード（七剣）』**（〇五）。舞台は中国西北地方、時代は一六六〇年代の「反清復明」「滅満興漢」をスローガンとした闘いの時代。『七人の侍』（五四）や『荒野の七人』（六〇）ならぬ中国の「七剣」が織りなす波瀾万丈の物語とCGを排除した肉弾戦の迫力は興奮また興奮の連続となること請け合い。『PROMISE』のつまらなさ（？）と是非対比してもらいたいものだ。

7 **『故郷の香り』**（〇三）は、『紅いコーリャン』『至福のとき』等絶品揃いの原作を書いた莫言（モォ・イェン）の『白い犬とブランコ』を、『山の郵便配達』、『ションヤンの酒家』（〇二）の霍建起（フォ・ジェンチイ）監督が映画化したすばらしい作品。キーワードは「故郷」「一〇年の後」「初恋の女性」の三つ。北京電影学院俳優科を卒業した若きエリート郭小冬（グオ・シャオドン）と李佳（リー・ジア）が主演し、そこに『鬼が来た！』ですばらしい演技を見せた香川照之が耳の不自由な中国人役で熱演。

8 『愛の神、エロス』（〇四）の中の一話**『若き仕立屋の恋』**は、鞏俐（コン・リー）のチャイナドレス姿が切なく悩ましい純愛と性愛を描くもの。その美しいタッチは王家衛（ウォン・カーウァイ）監督が張曼玉（マギー・チャン）の最高のチャイナドレス姿を表現した『花様年華』（〇〇）の再現！また**『オーギュスタン／恋々風塵』**（九九）は、『宋家の三姉妹』（九七）と『花様年華』の合間に埋もれていた（？）張曼玉主演の秀作。パリ一三区のチャイナタウンという異郷の地に住む鍼灸師の彼女は、『ローマの休日』（五三）のオードリー・ヘップバーンと同じように素敵で、フランス語のセリフも堂々としたもの。ちなみに、こんな中仏の文化交流がイラク戦争をめぐって中仏の接近をもたらした一因かも？

9 中国の山田洋次と呼ばれる馮小剛（フォン・シャオガン）製作総指揮、第六世代の路學長（ルー・シュエチャン）監督による**『わが家の犬は世界一』**（〇二）は、九五年に実施されたペットの登録料を巡って北京に

生きる庶民の姿を描いた異色作。その主役は、『さらば、わが愛／覇王別姫』（九三）、『活きる』、『キープ・クール』（九七）、『ハッピー・フューネラル』（〇一）の名優葛優。鑑賞翌日の〇五年四月二八日付朝日新聞には「自宅と別に犬舎、世話係四人、購入費三九〇〇万円という見出し」で一匹百数十万円のチベット犬一四匹を飼っている社長の姿が紹介され、貧富の差が拡大する北京の事情が「お犬サマ」の取り扱いを巡っても顕著に・・・。

10　『スピリット』（〇六）は、天津一の格闘家を目指す李連杰扮する霍元甲が一九一〇年九月一四日上海で開催された史上初の異種格闘技戦で、中国の威信をかけて闘う史実に基づく物語。頂上決戦の相手は中村獅童扮する日本人武術家だが、二流国中国に勝たせるわけにはいかない主催者たちは秘かに毒を・・・。それから約百年後の〇六年に私は上海を訪れたが、スクリーン上で観た一九一〇年との相違は？

11　マスコミから「時代の寵児」ともてはやされ、〇五年の九・一一総選挙では衆議院議員に立候補したホリエモンこと堀江貴史や村上ファンドの村上世彰の逮捕は「偽装国家」ニッポンのインチキ性を白日の下にさらけ出した。しかし一九八四年に青島で生まれた冷蔵庫製造会社であるハイアールの躍進とそのCEO張瑞敏の姿を描いた『CEO（最高経営責任者）』（〇二）は、「これぞ企業経営者！」という姿を描いた必見の感動作。日中関係は靖国参拝問題を巡って「政冷経熱」ぶりが続いているが、「経熱」を真に実りあるものにするためには、日本企業に張瑞敏のような信念をもった経営者の登場が不可欠。〇六年五月一日から施行された新会社法、中央青山監査法人の粉飾決算を受けて重要視されはじめた会計監査のあり方、そして企業経営そのものの学習のためには、つまらない講師を招いたセミナーの開催よりもこの映画を上映して心に感動を与える方がよほど有益だと私は思うのだが・・・。

六　今後の中国映画の注目点

1　政治的にも経済的にもまた軍事的にも近時中国の力の伸びが著しいが、それは映画の世界でも同じ。また『キネマ旬報』〇六年七月上旬号が特集しているように、近時アジアの合作映画が多くなったのが大きな特徴。『HERO』『PROMISE』『DAISY』（〇六）など中国・韓国・香港・日本の才能を集結させ、市場としての中国語圏を明確に意識した映画が続出している。そこに取り上げられた今後の合作映画の注目作は、①香・中・台・韓スター競演のミュージカル映画『ウィンタ

ー・ソング』、②亡くなった霊魂が四九日間とどまる地上の空間、中天を舞台に展開される不思議な物語『**中天**』、③アン・ソンギとアンディ・ラウ主演で春秋時代を舞台に、梁城の攻防をめぐる二人の男の対決を描いた『**墨攻**』、④私も憧れていた囲碁界の功労者の生涯を描く田壮壮（ティエン・チュアンチュアン）監督の『**呉清源**』などの大作だが、⑤本木雅弘が趙薇らと競演する『**夜の上海**』、⑥田中麗奈が台湾の若手スターと競演し昔々の時代にタイムスリップする『**幻遊伝**』も楽しみだ。「東アジア共同体」創設の構想と、その中で今中国が果たそうとしている主導的役割と対比しながら、映画の世界における「アジア合作」についても大いに注目したい。

2

中国特有の「負の遺産」が六六〜七六年に吹き荒れた文化大革命と八九年の天安門事件。これによって迫害され翻弄された人々は無数に存在するが、前記朝日新聞によると中国政府で映画事業を管理するラジオ・映画・テレビ総局は「シナリオの事前審査をパスしない映画の撮影や放映を認めないとした新しい『映画管理規定』を定め、六月二二日から施行する」とのこと。そんな中、許可を得ないゲリラ的な出品であった婁燁（ロウイエ）監督（四一歳）の『頤和園（サマーパレス）』が〇六年五月のカンヌ国際映画祭でコンペティション部門二〇作品の一つに選ばれて話題を呼んだ。五〇〜六〇年代、フランス映画界に吹き寄せた新しい波がヌーベルバーグだが、日本では『青春残酷物語』（六〇）の大島渚や篠田正浩・吉田喜重監督らが松竹ヌーベルバーグと呼ばれ、八〇年代の張藝謀・陳凱歌が中国ヌーベルバーグと呼ばれた。また『イージー・ライダー』（六九）や『明日に向って撃て！』（六九）がアメリカン・ニューシネマと呼ばれたように、若手監督による映画界の改革・刷新はいつの時代でも不可欠なもの。こんな状況の中、今後の中国映画界において第六世代監督や「ポスト文革世代」の監督たちが、中国特有のタブーとどのように闘って問題提起をし、どのようなヌーベルバーグぶりを発揮していくのか大いに注目したい。

（後注）本稿校正中の九月六日付新聞各紙は、中国国家ラジオ・映画・テレビ総局が九月一日婁燁監督とプロデューサーらに対し、今後五年間映画製作を禁止する処分を下したと報じた。これは『頤和園』が天安門事件に触れた点と、若い男女の過激な性描写が問題視されたため。「南京事件」をめぐる陸川監督の対応は前述したが、「中国電影」の発展のためには、多くの有能な映画製作者たちがこのような激しい言論統制にどう立ち向かい、どう闘っていくのかが大きな課題であることが再認識させられることになった。

（弁護士）

別表『坂和的中国電影大観』目次

これぞ中国映画	製作年
ヌーベルバーグ作品	
黄色い大地（黄土地／Yellow Land）	84年
盗馬賊（HORSE THIEF）	85年
大閲兵（BIG MILITARY PARADE）	85年
紅いコーリャン（紅高粱／Red Sorghum）	87年
菊豆（Ju Don）	90年
文芸名作	
古井戸（老井／OLD WELL）	87年
朱家の悲劇（家丑／FAMILY FEUD）	94年
新生中国の歩み～文化大革命批判	
芙蓉鎮（Hibiscus Town）	87年
青い凧（藍風箏／Blue Kite）	93年
さらば、わが愛／覇王別姫	93年
活きる（活着／To Live）	94年
新旧名作を比較する！	
小城之春	48年
春の惑い	02年
戦争・歴史	
夢とロマンの始皇帝	
始皇帝暗殺（The First Emperor）	98年
HERO（英雄）	02年
項羽と劉邦－その愛と興亡　完全版（上集「西楚覇王」　下集「楚漢争覇」）	94年
三国志あれこれ	
三国志〈国際スタンダード版〉	96年
スーパー歌舞伎「新・三国志Ⅱ－孔明篇」	01年
唐の時代、そして宋、明、清へ	
ヘブン・アンド・アース（天地英雄／WARRIORS OF HEAVEN AND EARTH）	03年
国姓爺合戦	01年
阿片戦争に学ぶ	
阿片戦争	59年
阿片戦争（鴉片戦争／THE OPIUM WAR）	97年
日中戦争を考える	
宋家の三姉妹	97年
戦争と人間／３部作	70年、71年、73年
劇団四季「異国の丘」（ミュージカル）	01年
監督・俳優特集	
張藝謀監督の「しあわせ３部作」	
あの子を探して（一個都不能少／Not One Less）	99年
初恋のきた道（我的父親母親／The Road Home）	00年
至福のとき（幸福時光／Happy Times）	02年
姜文特集	
キープ・クール（有話好好説）	97年
鬼が来た！（鬼子来了／DEVILS ON THE DOORSTEP）	00年
ミッシング・ガン（尋槍！／THE MISSING GUN）	01年
霍建起監督特集	
山の郵便配達	99年
ションヤンの酒家（生活秀／Life Show）	02年

追悼　張國榮	
欲望の翼（阿飛正傳／DAYS OF BEING WILD）	90年
楽園の瑕（東邪西毒／ASHES OF TIME）	94年
ブエノスアイレス（春光乍洩／Happy Together）	97年
追憶の上海	98年
ビバ！美人女優	
たまゆらの女	03年
花様年華（IN THE MOOD FOR LOVE）	00年
ふたりの人魚	00年
恋する惑星（重慶森林／Chungking Express）	94年
キリング·ミー·ソフトリー（KILLING ME SOFTLY）	01年
テーマ別	
学校特集	
子供たちの王様（孩子王）	87年
草ぶきの学校（草房子／THATCHED MEMORIES）	99年
思い出の夏（王首先的夏天／HIGH SKY SUMMER）	01年
お葬式２題	
ハッピー・フューネラル（大腕／Big Shot's Funeral）	01年
涙女（哭泣的女人／Cry woman）	02年
都市・住宅問題を考える	
ハリウッド★ホンコン（香港有個荷里活／Hollywood★Hong Kong）	01年
上海家族（假装没感覚／SHANGHAI WOMEN）	02年
ヴァイオリン２題	
小さな中国のお針子（Balzac et la petite tailleuse chinoise）	02年
北京ヴァイオリン	02年
北京に生きる！	
北京の天使	92年
きれいなおかあさん（漂亮媽媽／Breaking The Silence）	99年
感動作を涙とともに	
再見～また逢う日まで～（我的兄弟姐妹／ROOTS AND BRANCHES）	01年
最後の恋，初めての恋（最后的愛，最初的愛）	03年
近時の中国映画は？	
近時の話題作	
インファナル・アフェア	02年
インファナル・アフェア～無間序曲～（INFERNAL AFFAIRS Ⅱ）	03年
イチかバチか－上海新事情	00年
青の稲妻	02年
最新作	
愛にかける橋（芬妮的微笑／ON THE OTHER SIDE OF THE BRIDGE）	02年
LOVERS（十面埋伏）	04年
2046	04年
これぞドキュメント	
鉄西区（Tie Xi Qu／West of Tracks）	03年
延安の娘	02年
台湾映画もお忘れなく	
藍色夏恋（BLUE GATE CROSSING）	02年
ダブル・ビジョン『双瞳』（DOUBLE VISION）	02年